堀田善衛著

情熱の行方

—スペインに在りて—

岩波新書

201

堀田善衛著

情熱の行方

―スペインに在りて―

[redacted]

207

堀田善衛

1918年富山県に生まれる
1942年慶応義塾大学文学部卒業
現在—作家，評論家
著書—「インドで考えたこと」
「キューバ紀行」
「スペイン断章」(以上岩波新書)
「広場の孤独」「歴史」「時間」
「海鳴りの底から」「審判」
「スフィンクス」「ゴヤ」

情熱の行方　　岩波新書(黄版) 201

1982年9月20日　第1刷発行 ©

定価 430円

著者　堀田善衛

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目　次

Ⅰ　サンティアゴ・デ・コンポステーラにて……1
Ⅱ　語るに忍びざるもの……35
Ⅲ　無政府主義の実行について……65
Ⅳ　アラゴン地方にて……83
Ⅴ　カタルーニア地方にて（1）……103
Ⅵ　アンドーラ公国にて……123
Ⅶ　カタルーニア地方にて（2）……141
Ⅷ　中世の道……157

IX バスクの人々……179
X 地中海の円型劇場……195
あとがき……217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

I　サンティアゴ・デ・コンポステーラにて

サンティアゴ・デ・コンポステーラは、雨に煙っていた。

半砂漠のような荒蕪地と裸の岩山の屹立するカスティーリアやアンダルシーア地方のきびしい風景と比べて、このイベリア半島の北西端の地を占めるガリシア地方は、その緑ゆたかな、起伏のゆったりした山や丘と、緑のなかに点綴する花崗岩の白さが目に滲みるように思う。

この地の果てに、フィニステルレ(地の果て)と呼ばれる、大西洋の大型のうねりに洗われている岬がある。断崖の上に燈台があって、背後の入江に小さな漁村をもつ、要するにそれだけのところであるが、ここはスペイン人諸君にとっても、またヨーロッパの人々にとっても、地の果て(Finisterre)であった。地中海への入口、あるいは出口としてのジブラルタールがかつて地獄の在り場所として想定されていたとすれば、この地の果てはどういう心持ちを人々に持たせたものであったか。

ともかく、これっきり、あとは無限の海洋、という在り様が人々に与えたものは、あまり喜ばしいものでなかったことだけはたしかであろう。ヨーロッパの西の辺境である。

この大洋がもたらす海洋性の気候のために、ガリシア地方は雨と霧の日の方が多いのである。従って風景は、スペインの大方のそれよりもむしろスコットランド、あるいはアイルランドに

近く、人種的にも人々はケルト系であり、楽器はギターやカスタネットではなくて、バグパイプである。ギターやカスタネットは、やはり乾燥し切った空気のなかでなければ響きがわるかろう。

けれども歴史の中世紀に何が、かかるヨーロッパの最果てへと、単にヨーロッパ全体の人々だけではなくて、記録によるとインドやエティオピアからまで、人々を巡礼へと呼び出したものであったろうか。

パリから勘定をしてみても片道約一五〇〇キロ、往復で三〇〇〇キロを、多くて数十人単位の集団、少ければ七、八人から二、三人の集団を組んで、早くて約九〇日で往復をする。乗り物はない。馬や馬車を利用しうるのは中世紀にあっては王侯貴族だけである。道はといえば、特にピレネーを越えてスペインへ入ってからはどの道も最悪に、もう一つ最をつけ加えてもよいほどのものであったことは、十九世紀に入ってからの、英国陸軍のスパイたちの報告にさえ明らかである。二〇〇〇年前のローマの植民地であった時代の方が、むしろ現代的な石畳の道があったものであったが、中世紀に入ってはすでにそういう古舗道は崩れ果ててその体をなしていなかった。ローマ人たちのようには、交通、交易、戦争などのためのそういう舗道を必要としなかった人々は、舗石をひっぺがして家を建てるための材料にしてしまった。あるものは森

にかくれ、また洪水などによって洗い去られてしまった。

スペインの、単にこの北西部だけではなくて、山や谿谷の、現在の自動車道路のつい近くに、あるいは何の関係もないところに、ローマ時代の石の橋が一つだけ、ぽつんと取り残されたように架けられたままに存在しているのを見ることは、人の胸を締めつけて来るような経験をさせる。かつて私どもは北部海岸の牧場の村に住んでいて、そういう橋をしばしば見たものであった。時計などというものと、これも関係のない、目にも見えず手で触ることも出来ないが、厳然として存在する時間というものを経験させるのである。そういう経験こそが歴史経験というものの原型であって、その他のことは説明というものであろう。

サンティアゴ・デ・コンポステーラで私を待っていたものもまた、この石のような時間であった。ここで少し早まって、また言いすぎを一つ犯してしまうとすれば、ヨーロッパに住んでの私の経験の大部分を占めるものもまた、この石のような時間であり、また時間を化してもつ石そのものであったと言えるかもしれない。……

このヨーロッパの地の果てに位置するサンティアゴ・デ・コンポステーラは、ローマ、イエルサレムとともに、かつてのキリスト教徒にとっての三大聖地の一つであり、この地への巡礼

に歩いて往復をする人々は、最盛期の十二、十三、十四世紀頃には、正確な統計などはもちろんありはしないのであるが、年に八〇万人から一〇〇万を越えたものであったという。

史書の一つは、この盛況を、紀元一〇〇〇年という大世紀末、世の末をともあれ何事もなく通り過ごしえたことに帰している。それはさもあらんかと思われる、ヨーロッパにおいての一つの大経験であったであろう。

巡礼たちの大きな集合点の一つは、パリであった。セーヌ河の右岸、市役所に近いところにある一つの広場が、サン・ジャックと呼ばれている。ヨーロッパでの面倒なことの一つは、単に宗教的聖者の名だけではなく、国、あるいは地域によって同じ名の呼び方が異なることであるが、早いうちにこれを説明してしまうとすれば、スペイン名サンティアゴは、邦訳聖書では聖ヤコブであり、フランス読みではサン(聖)・ジャックとなり、英国ではセイント(聖)・ジェームズとなる。現在私の住んでいるスペインのカタルーニア地方では、ペードロはカタラン語でペレとなり、そう呼ばないと機嫌がわるくなるのであるから、困ったものである。しかもこの同じペレと一緒にマドリードへ出掛けて行くと、ここではカスティーリア風にペードロと呼んでくれと同じ男が言い出す。それもまた一つの、ヨーロッパである。

パリの、このトゥル・サン・ジャックの広場にある現在の塔は、おそらくすぐ近くにあるノ

ートル・ダーム大聖堂にあわせたゴティック様式のもので、大革命の後にとり払われた寺院ののこりということであるから、はるかなむかしむかしに、ここに集った巡礼たちのことを思わせるものではない。塔のなかに思想家パスカル氏の彫像が居座っていたり、外の広場の一角に『オーレリア』の作者である詩人ネルヴァルを記念するものがあったりで、ほんの数百年前にほとんど全ヨーロッパのキリスト教徒たちの心を揺さぶりかえして巡礼への道程に喚び出し、誘い出したものを、むしろ消したいとでも思っているのではないかと疑わせるのである。

しかし、それは消し難い……。この広場からシテ島をわたって南へ南へと下って行く——地形的にはのぼりだが、パリの街路のなかで単一の名をもつものとしてはもっとも長い距離をもつ——道は、サン・ジャック大通りと呼ばれている。

この道を、日本風に言うとして巡礼たちが三々五々、南へと下って行った、と言いたいところであるが、そうは行かなくて、九つほどのグループに仕分けられたもののようである。第一は歩みの遅い老人組で、全体の半分以上は途中で非命に倒れるものとされていた。第二は騎士団で、女性巡礼者はこの一団によって守られて行くものとされていた。第三は僧侶や修道者たちで、諸王や貴族、枢機卿などまでが含まれていた。第四は、犯罪者たちで、これは監獄へ放り込まれるか、それともこの巡礼行に行って来るか、と刑を選ばされた連中である。ここにす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

でにこの巡礼行が純一な信仰の行為とは言いがたくなっていることの様相があらわれているであろうが、それがおそらく人間の世間というものであろう。彼らのうち少からぬ連中は、スペインへ入っての最初の町であるパンプローナで、〝たしかに行って来たことを証明する〟というお札を買ってさっさと帰って来たもののようである。なかには帰らないで仲間の巡礼を襲う商売に鞍替えをした連中もいた。ついで乞食、泥棒、追い剝ぎ等の街道にいることが生計そのものである商売人たち。乞食たちのなかには、本来的に五体満足なのに、手や足を巧みにしばりつけて不具をよそおった連中もいたようである。如何にして手足をしばりつけるか？　そのやり方を図解した手引き書までがあった。商売商売である。その次に商人、建築業者、絵師、彫刻師、その他の遊芸人たち。このグループは特に巡礼行に出るというのではなくても、中世の時世にあっては、仕事のあるところがすなわち彼らの居所であったのである。国の別などはさしたる問題ではなかった。それから巡礼行とはいうものの、別の政治的な使命をもったスパイ的な僧侶たちが続く。この最後のグループは、南フランスのラングドック地方や、トゥルーズを中心とするピレネー山脈のあたりに異端派が盤踞していたり、またスペインのナバーラ王国がつねにフランスとカスティーリア王国の間で動揺しているといった情況を把握する必要のあった王侯たちから派遣されていたものであった。

それから、階級的に、あるいは社会的に以上のようにはっきりと類別の出来ない一、二のグループが続く。続くというよりは、このグループはその全道程に、つねに断続的に点々として存在したのである。すなわち、社会的全階級を通しての不治の病者、第一に癩病患者、それからありとあらゆる不具者、身体的異常者である。嗜虐趣味的なところのあった画家ゴヤが描きそうな人々の全体。……

これらの巡礼たちのことについて、ここまでのことは私もかつて書いたことがある(岩波新書『スペイン断章』)のであるが、繰り返してこの主題をとりあげてみたいと思うにいたったのは、最後のグループのことは一応措くとして、いったい彼らを衝き動かして住みなれた家を捨て、家族と別れ、途中の艱難を思う心を乗り越えさせ、老齢の人々にとっては十中五、六というほどの死亡率のことも承知の上で、「もうこれまでと思った時はお前の死の日なのだ、一歩でもかせげ、前へ、そして歩きつづけよ。止まってはならぬ、振り向いてもならぬ、道をそれるな。進めないなら足踏みでもせよ!」という、かくまでの衝迫をもたらしたものが何であったか、という思いがどうしても残るからであった。

はじめの三つくらいのグループまでは、大抵は死を覚悟して財産家財などの処分をし、遺書を公証人に託して出発したものであった。こういう人々の〝心境〟なるものを垣間見させてく

れる文書文献というものも少くはないのであるが、そういうものを見ていて私がいつも感じることは――異教徒として――、彼らのもっていた〝罪〟、〝罪障〟感というものについての、はっきり言っての違和感である。それはあたかも罪が大きければ大きいほど、救いもまた大きく深い、と言っているかに思われる。

時代と社会を異にしているとはいえ、同じ人間が、という思いもまた残るのである。

そういう思いが残るとはいうものの、現在とはまったく異なって、社会的、宗教的、その他もろもろの状況の違いのなかにあった中世の人々の心情心境というものがはっきり把握出来るなどとは私も思ってはいない。そうして、言うまでもなく史書はいろいろにその動機や原因なるものについての説明を書いていてくれる。しかも動機や原因が説明されればされるほど、謎が深まって来ることもまた避けられないのである。

かくてわかりやすい例、世俗の側からの、いわば逆方向からの説明ということになると、それはなんともはや卑俗、卑近なことになってしまう。

まずこの最後のグループについては、不治の病患に悩む人々が家を出て道につくことは珍しくもなんともなかった。癩病患者にとって、道路や寺社の境内あるいは階段が生活のためのそ

の場所であったことは、つい半世紀ともう少し以前にはわが日本にあってもその通りであった。私にしても、幼年時代に熊本の清正公の神社でそれを見てひどく怯えさせられたことがある。

そして西欧の中世紀には黒死病（ペスト）という怖ろしい病気が定期的に、と言いたいほどに人々に襲いかかって来た。十四世紀には西欧人口の三分の一、あるいは四分の一がこれによって死滅し、人々はそのきざしの見えた人をいち早く道路に、町や村の囲いの外へ追い出したりしたものであった。つまりは、捨てた、のである。

現在でも西欧には、この黒死病防止に関する法律が生きているところがいくらでもある。

不具者や身体異常者が、聖者たちのもたらした恩寵によって突然快癒したといった話は、実に無数にあるのである。その例をあげるまでもあるまいと思われる。これらの人々の症例をあげて行けば、優にわが日本の病草紙（やまいぞうし）を上まわるものになるであろう。そうして夜の宿りに、――それがあったとしての話であるが――どこそこの教会のナントカ聖人が、あるいはその遺骸や遺物がお前さんと同じ病いの治癒に抜群の効があったなどという語り伝えを聞かされれば、それはまたとない慰めであり救いでもあったのである。

そうして時代が下って来ると、かつて敬虔なる行為とされたものがやがて弥次り倒されるということになるのも、またやむをえない。

子供がどうしても出来ない夫が子をさずかりたいと願ってサンティアゴ巡礼に出掛けた。長い留守の後に家へ帰ってみると、二人もの子供が授かっていた。……

こういうことになると、そこにすぐにも出て来るのは、信仰と迷信、あるいは歴史と伝説という問題であるが、そういうところへたちまちはまり込むのは粗相というものであろうし、私は実証主義者でもなければ歴史家でもない。

逆方向からの説明のいくつかの例として、次のようなものもある。いわば個人ケースの分析である。

ある男、借金で首がまわらなくなった。そこであわてて巡礼に出た。少くともその留守のあいだは借金取りもあまりなことは出来ないだろう。……

またある男、異端の傾きがあると強く非難をされた。そこで悔い改めるために巡礼に出て、その当時としては至福なことに、サンティアゴ聖堂の聖壇の前で生命を終えた。それは模範的かつもっとも幸福な巡礼者の象徴として語りつがれ、信仰に疑いを持つ人々の希望の星となる。……

ある司教は、ローマ法王の主催する公会議に出たくないので、巡礼に出た。……

ある学者は、スペインにいるイスラム教の大学者、ユダヤ教の大学者に会うために出掛けた。

……

私はあまり卑近かつ卑俗な例ばかりをあげたかもしれない。まだまだあるのである。

代参である。遺言で遺産の一部を「誰か貧乏な男に与えて」おれの代りにコンポステーラの大聖堂で祈り、かつ供物と金を喜捨して来てくれ、と言い残す者から、夫の病気を直してもらうために下男に行かせる女性、個人ばかりではなくて、市や町がたとえば日照りや雨降りからまぬがれるために人を雇う例まで、これもまた枚挙にいとまがなく、こうなればこれはもう巡礼引き請け業となってしまう。

こういう例は、実は挙げても仕方のないものではあるが、聖が俗と化し、俗が商売化して行くための距離というものも、時間と社会的なその距離もまた目に見えているのである。

けれども、卑であろうが俗であろうが、そこに超現実的、超自然的なものに触れておのが魂と肉体の救いを得たいとする心持ちは、上から下まで、あるいは下から上まで、これもまた目に見えているのである。それはあたかも一つの社会制度が、魂の救いという、異様かつ非社会的なものの上に置かれているかに見えて来、かつその通りであったのであろう。社会制度なるものが、もっとも非社会的なものの上に基礎づけられることがありうることを、これらの状況は証し立てているであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong